ゴールの先「命」救う

ライフセーバー 遊佐 雅美

母のまなざし

愛する人が目の前で溺れていたら、あなたは助けることができますか―。

人命救助の講習会で、講師が問いかけた。「助けたい」と心の底から思った18歳の少女は、ライフセーバーの道を歩み出す。以来20年間、初心を忘れず、精進した遊佐雅美(三)は、世界的なアスリートの顔を持つまでになった。

海での人命救助に必要な技術を高める狙いで行われるライフセービング競技。雅美は人気種目のビーチフラッグスで世界の頂点に上り詰めた。

後ろ向きにうつぶせになり、スタートの合図で走り出し、20㍍先に置かれたホースを取り合う。時間にしてわずか4秒ほど。瞬発力、脚力、一瞬の判断力がものをいう。優勝するためには、いす取りゲームのように最後の1人になるまで9～10本こなす。過酷なサバイバルレースでもある。

幼少期から運動神経は抜群だった雅美だが、母のトキ子さん(六)は、負けん気の強さの方が印象に残っているという。

「三つ上の兄と常に張り合ってましたね。兄が水泳を始めれば、『私も行く』と言って聞かない。その水泳教室は5歳からなのに、無理にお願いして3歳で通い始めました。兄がそろばんを始めれば、まだ幼稚園児なのにそろばん塾に。万事がこんな感じでした」

雅美は「母から勉強しなさいって言われたことは一度もない。ただ同級生をいじめたときはものすごくしかられた」と振り返る。子どもの自主性を尊重するのがトキ子さん流。雅美がライフセーバーになると決めた時も、「海は危険」と心配しながらも、自分の意志で道を切り開こうとする娘が誇らしかった。

〝天職〟に出合った雅美は、156㌢のきゃしゃな体にむち打って、毎日、厳しいトレーニングに励んだ。大男だから助けられませんでした、は通用しない。「溺れている人を選ぶことはできない」。覚悟がにじんだ娘の言葉を、トキ子さんは鮮明に覚えている。

高校時代は陸上の短距離選手。根っからの負けず嫌いもあって、雅美はビーチフラッグスですぐに頭角を現す。競技を始めて2年目の1993年に早くも全日本選手権を制すると、翌94年には世界一に。日本一は17年連続でいったん途切れたが、昨年、すぐに雪辱し18度目の優勝を飾った。しかし、雅美はきっぱり言う。「勝つことは二の次。競技は人命救助に役立てるもので、ライフセーバーとしての成長が一番の目的だから」

トキ子さんは「数年前から、もうやめてもいいんじゃないのという話はしているんです。でも負けてやめるのは嫌いなのよね」。傍らで雅美が言葉をつなぐ。「周りは40歳までとか、(全日本で)20回優勝するまでやったらと言うけど、体力の続く限りは続けていきたい」

ライフセーバーが子どものあこがれの職業になっている本場・オーストラリアでは、「最高の競技者は、最高の救助者」という格言がある。ビーチフラッグスは、1秒でも早く溺れている人にたどり着いたり、救命用具を準備しようと始まった競技。ゴールの先には「命」がある。雅美の強さの理由をトキ子さんはどう思っているのか。

「娘が世界チャンピオンにまでなれたのは、早く助けたいという思いが、誰よりも強いからだと思っています」

（牧田幸夫）

ビーチフラッグスで無敵の強さを誇る遊佐雅美（手前）。14連覇を達成した2006年の全日本選手権大会から＝日本ビーチ文化振興協会提供

子どものころの思い出などを話す遊佐雅美㊥を優しく見つめる母親のトキ子さん＝川崎市内で

ゆさ・まさみ　高校時代は陸上部で短距離選手。東京健康科学専門学校でライフセービングを始める。ビーチフラッグス競技の第一人者で、全日本選手権は17連覇を含む18度優勝。世界選手権も4度優勝の実績を持つ。NPO法人日本ビーチ文化振興協会理事として、海辺の安全教室や講演会など啓発活動にも精力的に取り組む。西浜サーフライフセービングクラブ（藤沢市）に所属し、夏は海水浴場でパトロールにあたる。川崎市出身。38歳。